ISSN 0911-0356

言文

60

体験としての『平家物語』　日下　力（ 1 ）

「伝統的な言語文化」に関する系統的指導のあり方　井実　充史（ 15 ）
—小・中学校の「枕草子」教材を中心に—

字源指導を取り入れた初等漢字教育の試み　澁澤　尚（ 27 ）
—白川文字学と『漢字カルタ』とを活用して—

副詞「つらつら」の意味変化　佐藤　宣男（左 9）
—インターネット資料を中心に—

高校国語科評論文の読解指導について　渡邊　州（左 2）

《新刊紹介》
澤正宏編『西脇順三郎研究資料集』全三巻　高橋　由貴（ 51 ）

2011年度修士学位論文・卒業論文題目　（ 58 ）

彙　報　（ 63 ）

２０１２年度
福島大学国語教育文化学会

内閣告示第二号

一般の社会生活において現代の国語を書き表すための漢字使用の目安を、次の表のように定める。

なお、昭和五十六内閣告示第一号は、廃止する。

平成二十二年十一月三十日

内閣総理大臣　菅　直人

追加字は一九六字であり、「勺・錘・銑・脹・匁」の五字が旧常用漢字表から削除された。追加字については、字体・字形の問題が繁雑なので、左記の文化庁主頁内pdf文書を参照されたい。

常用漢字表（平成二十二年内閣告示第二号）

http://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/pdf/jouyoukanjihyou_h22.pdf

＊この小論は、福島大学文学・芸術学系プロジェクト報告書「美・文・音　テーマ『教科内容学』」（二〇一〇年三月）所収の拙稿「字源指導を取り入れた初等漢字教育の試み―『一〇一漢字カルタ』を活用して―」に基づき、それに追補修正を施したものである。また、二〇一一年より継続的に開催している、主に県内小中学生対象の「漢字で元気に」プロジェクト『福島漢字探検隊―漢字あそび大会』（福島大学・立命館大学・東洋文字文化研究所共催）など、さまざまな機会において「漢字カルタ」の実践に協力を願った学生諸君に感謝する。

（しぶさわ・ひさし　本学教員・漢文学）

《新刊紹介》

澤正宏編『西脇順三郎研究資料集』全三巻

高橋由貴

一九六二年のノーベル文学賞候補に西脇順三郎の名前があったことは既に広く知られていたが、今年（二〇一三年）一月一四日、スウェーデン・アカデミーへの新たな情報公開請求によって、谷崎潤一郎とともに、西脇が一九五八～一九六二年の間に四度も、受賞候補者としてノミネートされていた事が報道された。もし西脇がノーベル賞を取っていたならば、日本の近現代文学はまた異なる様相を呈したのではないか――そんな夢想をかき立てるニュースであった。

近年ますます注目を集めている西脇順三郎であるが、このたび、本学名誉教授である澤正宏氏の編集・解説のもと、『西脇順三郎研究資料集』が上梓された。「西脇順三郎没後三〇年記念出版」と題されたこの資料集は、全三巻の構成を採り、現在では入手困難な資料を復刻して広範に収めた貴重な書となっている。澤氏は、西脇順三郎の詩業を広く世に知らしめ、また西脇の詩的営為の全体像を明らかにする優れた論文を持続的に発表されている。その長年にわたる調査と研究成果からもたらされた本書の内容をご確認いただきたい。

第一巻［詩集］

・英文詩集『spectrum』（Cayme Press, London、一九二五年）

・仏文詩集『Une Montre Sentimentale』（小千谷市立図書館蔵、一九二五年）

・英文詩集『Poems Barbarous』（私家版・丸善三田出張所、一九三〇年）

・『Ambarvalia』（椎の木社、一九三三年）

・『あむばるわりあ』（東京出版、一九四七年）
・『旅人かへらず』（東京出版、一九四七年）
・澤正宏「西脇順三郎の詩「馥郁タル火夫」を読む」（上）（中）（下）（『福島大学人間発達文化学類論集』、第一号、第二号、第三号、二〇〇五～二〇〇六年）

第二巻［詩論集・文学論集］

・『超現実主義詩論』（厚生閣書店、一九二九年）
・『シュルリアリスム文学論』（天人社、一九三〇年）
・『西洋詩歌論』（金星堂、一九三二年）
・『純粋な鶯』（椎の木社、一九三四年）
・澤正宏「西脇順三郎のモダニズムの詩と詩論」（『立命館文学』第四三五～四三六合併号、一九八一年。後『西脇順三郎の詩と詩論』、桜楓社、一九九一年）
・澤正宏「西脇順三郎のモダニズム詩観における「無」について」（『言文』、第二四号、福島大学国語学国文学会、一九七六年。後『西脇順三郎のモダニズムの詩と詩論』、桜楓社、一九九一年）

第三巻［全集未収録資料集］

Ⅰ　全集未収録資料

一、『西脇順三郎全集』未収録資料

・澤正宏「『西脇順三郎全集』未収録資料」（一）～（六）（『花園大学研究紀要』、花園大学文学部、第一五号、第一六号、第一七号、第一八号、および『福島大学教育学部論集』人文科学部門、福島大学教育学部、第四八号、第四九号）

二、その他

・THE SAVOYに就いて（English literature and philology：Annul 1929-1930 Volime1）
・"Feminin Endings" in Chancer（English literature and philology：Annul 1929-1930 Volime1）
・A Note on Old English Word-order（古代英語の語句順序）（English literature and philology：Annul 1931-1932 Volime3）
・「言語学概論」（『日本現代文章講座　原理篇』、厚生閣、一九三四年）
・「現代イギリス文学」（『日本現代文学講座　研究篇』、厚生閣、一九三四年）
・「座談会　英文学研究の立場」（『文芸』、改造社、一九四〇年）

三、『口語と文語』（研究社、一九三六年）

四、『Pointed Roofs』Dorothy M. Richadson, with introdution and notes by Junzaburo Nishiwaki（研究社現代英文学叢書、KENKYUSHA、一九三五年）

Ⅱ　蔵書目録

・澤正宏『西脇順三郎蔵書目録』（一）～（四）（『国文学論究』、花園大学国文学会、第一三号、第一四号、第一五号、第一九号および『福島大学教育学部論集』人文科学部門、福島大学教育学部、第四五号、一九八九年）

Ⅲ　その他

［記念講演］

・澤正宏「『ギリシア的抒情詩』の奥深さ」（『幻影』第二七号、「西脇順三郎を偲ぶ会」、二〇一〇年）
・新倉俊一「西脇さんの最後の座談」（『幻影』第二三、二四合併号、二〇〇七年）

［研究史］

・澤正宏「研究動向　西脇順三郎」（『昭和文学研究』第六集、昭和文学研究会、笠間書院、一九八三年）
・澤正宏「『ambarvalia〈アムバルワリア〉』研究史の概要」（『西脇順三郎「Ambarvalia〈アムバルワリア〉」作品論集成Ⅰ』、大空社、一九九七年）

［書評］

・澤正宏「二つの西脇順三郎研究―近藤晴彦・新倉俊一氏の著書について―」（『日本文学』第二九巻五号、日本文学協会、一九八〇年）
・澤正宏「新倉俊一著『西脇順三郎全詩隠喩集成』（『日本文学』第三二巻六号、日本文学協会、一九八三年）

・西脇順三郎写真（三葉）
・西脇順三郎自筆絵「夏の宴」（一九七九年）
・西脇順三郎自筆原稿（「文学評論に於けるドグマ」冒頭の原稿一枚）
・解題・解説

西脇研究史では、一九六〇年代に『西脇順三郎全詩集』（筑摩書房、一九六三年）と『西脇順三郎詩論集』（思潮社、一九六四年）という二つの全集が早くも刊行されており、主要テキストは整えられて久しい。加えて、十年ごとに新しい全集が編まれ（筑摩書房は、一九七二年に『西脇順三郎全集』を、一九七五年に『西脇順三郎詩と詩論』を、さらに一九八一年に『定本西脇順三郎全詩集』と『増補西脇順三郎全集』を、一九九四年に『定本西脇順三郎全集』を刊行している）、二〇〇七年には新倉俊一の編集によって『西脇順三郎コレクション　全六巻』も出版された。しかしながら、これまでこの難解な詩人にまつわる資料が十分に世に呈されてきたとは必ずしも言いがたい。本書は、そうした資料的な不備を補って余りあるもので、初版本の復刻や膨大な蔵書の目録一覧を掲載する本書によって、ようやく西脇文学の全貌が明らかにされたといってもよいだろう。

既存の全集と異なるのは、詩集や詩論の初版本といった

原典を重視している点にある。本を愛おしみ必ず原典や典拠に当たるという編者の研究方針がうかがえる。本書は、西脇や近現代詩の研究に携わる者にとって必読であることは疑いを容れないが、西脇に興味を持つ愛好家や初学者にとっても手に取りやすい構成と内容になっている。

本書について特記すべき事項は多くある。それを簡単に紹介しておきたい。

まず第一巻において着目すべきは、フランス語で書かれた詩集『Une Montre Sentimentale』が初めて復刻された点である。西脇にとって自信作であった『Une Montre Sentimentale』は、シモン・クラ（Simon Kra au 6 rue Blanche dans le IXe a Paris. マラルメやブルトンの著作を手がけた書店）に出版を断られたために原本が残されなかった幻の詩集である。岩崎良三がタイプし、小千谷市立図書館で所蔵しているコピーの形で残っているのみであるこの詩集が、容易に読めるようになったことは大きな喜びである。フランス語で詩作をする希有な詩人の詩・七七篇に、活字の配列や頁構成を確認しながら触れることが可能となっている。

また西脇の代表作『Ambarvalia』の椎の木社版（改作されて一九四七年に再出版された『あむばるわりあ』とは、詩の表現も採録されている詩篇の数も異なる）は、限定三〇〇冊の貴重書である。本書には、No 296というシリアルナンバーが記された初版の復刻が収められている。その中には、「ギリシア的抒情詩」の冒頭に掲げられた詩「天気」の三行が、西脇直筆（サイン付き）で刻まれた扉頁もある。独特な挿絵とともに、言語実験的なこの詩集の構成を閲することができる。同じ第一巻には、『Ambarvalia』から十四年後に出された『あむばるわりあ』初版の復刻も収録されており、両者の比較検討することも可能である。

第二巻および第三巻にも、従来の全集とは異なる貴重な資料が収録されている。西脇の弟子にあたる瀧口修造の三五頁にもおよぶ解説「ダダよりシュルレアリスムへ」を含む『超現実主義詩論』の復刻は、西脇の「超自然主義」や「超自然的ポエジイ」の内実を知る重要な一冊であり、また西脇順三郎と瀧口修造との一致点と相違点を探ることもできる。さらに全集では『ヨーロッパ文学』として一冊にまとめられた中の「文学批評詩序説」という形でしか読むことのできなかった『西洋詩歌論』も復刻されている。「分冊現代詩講座」として出版された年度と形態でこの評論を確認できるのも魅力的である。

第三巻で特に目を引くのは、言語学に属する資料が発掘されていることである。雑誌『English literature and philology』に掲載された論考三つ――フランス象徴主義とは異なる「英国的なsystem」を捉えようとする「THE SAVOYに就いて」、語順を解析することで古代英語を測

定しようとする「A Note on Old English Word-order（古代英語の語句順序）」、「open syllableでfeminin ending」を作る語のリズムを分析してチョーサー文学を考察する「"Feminin Endings" in Chancer」――はいずれも数頁ながら、言語実験的に新しい詩を模索してきた西脇を、日本文学史からだけでなく、言語学や比較文学といった方角から捉える資料にもなるだろう。同様に『口語と文語』を論じる独特の角度と分析の仕方、またリチャードソンDorothy M. Richardsonの長編小説の第一巻『Pointed Roofs』に施された注釈、「座談会　英文学研究の立場」での外国文学受容に対する主張等、西脇順三郎の新たな側面に光を当てる資料が数多く収録されている。

忘れてならないのは、本書では西脇の蔵書――新潟県の小千谷市立図書館所蔵の一一九七冊（およびノートとメモ各一冊）と津田塾大学図書館所蔵の二三五〇冊――が目録化されている点である。これだけの蔵書のタイトルを活字におこす作業には、どれだけの労力が費やされたのかと驚かされる。加えて、この小千谷市立図書館蔵の洋書が西脇が目を通した順に並べられていることから、この順序を忠実に再現する形で目録作成がなされている。これらは西脇の文学がどのような受容によって形成されたのかを知る上で非常に有益であり、資料的価値が高いものである

さらに、資料集の各巻に澤氏の研究論文、「西脇順三郎の詩「馥郁タル火夫」を読む」「西脇順三郎のモダニズムの詩と詩論」「西脇順三郎のモダニズム詩観における「無」について」が併せて収録されている点も見逃すことができない。

その中でもとりわけ「西脇順三郎の詩「馥郁タル火夫」を読む」は、いまだ単著に収録されていない論文であり、非常に興味深い。『西脇順三郎のモダニズム――「ギリシア的抒情詩」全篇を読む――』（双文社出版、二〇〇二年）は、副題が示すように、『Ambarvalia』の「ギリシア的抒情詩」部分の読解に限られており（厳密に言えば、論の濃密さから「ギリシア的抒情詩」のみでもかなりの分量になってる）、二〇〇〇年代半ばに提出されていた「馥郁タル火夫」についての考察は、本書ではじめて一括掲載されている。

…もっぱら理知的に日本の現代詩を改革しようと実践してきた西脇順三郎は、詩論のうえではその基盤にヴァレリーに代表されるような象徴主義詩の考え方をふまえていたのである。相違点は詩の言葉（表現）の意味の無を「純粋」とか「絶対」とかといっても、それを人間の存在とどう関わらせて考えたかというところにあった。／つまり、西脇順三郎は①で宣言した方法で表現される、意味の「無」による「純粋詩」ないしは

「絶対詩」にこだわるあまり、その「無」がヴァレリーの場合のような存在の無に抗えるような「無」ではなくなっているのである。この論考の第14章の最終部分で述べておいたように、西脇順三郎もヴァレリー同様に絶対的な存在の無に抗う詩人であった。このことは、既述したように詩「馥郁タル火夫」において永遠、死、無などといった絶対的な観念へのイロニーが多かったこと、とりわけ、⑰の「死よさらば！」という表現が絶対的な存在の無（「死」）に対するイロニーであったことの検証からも明らかであったわけだが、このような詩に対する自らの姿勢、態度と、詩「馥郁タル火夫」におけるような絶対的な無を象徴とする詩の表現を実現させていくこととの関わり合いを、彼は厳しく突き詰めて考えてはいなかった。／（中略）／だからヴァレリーの詩観にもどり、この詩観を捩っていえば、詩「馥郁タル火夫」の全体としての表現は、絶対的な存在に抗える表現ではなく、「感性の全領域」を消滅させる表現だったのである。

西洋の詩人ヴァレリーとの近さと遠さについて指摘するこの論文の結論部分は圧巻である。古代ギリシア・ローマ文化圏とキリスト教文化圏という遠い言葉同士を結びつける西脇の理知的な詩作の方法を冒頭の詩句より指摘し、詩全体に緻密な解釈を施した上で、西洋象徴主義詩の受容の様態と西脇の詩の独自性とを鮮やかに呈示している。この論文が収録されることで、西脇の詩の特徴、詩作の理念と方法的性格、文学史的な西脇の位置づけのすべてを知ることができる。他の二つも、既に上梓された『西脇順三郎の詩と詩論』（桜楓社、一九九一年）の核となる論文であり、日本におけるモダニズム詩の状況と西脇の詩の理念とがどのような緊張関係を有していたのかを明らかにしている。第二巻収録の詩論と併せ読むことで、西脇に対する一層の理解を得ることができる。

このように、収録された氏の論文は、一語一語の典拠やその語が選ばれた理由や意義を解明する注釈的な緻密さと、詩全体の中での言葉の連関を指摘する理論的な説得性を有するものばかりである。言語的才能に恵まれた博覧強記のこの詩人の詩を手に取る者にとって、これらの研究論文は最良の導きになるに違いない。

「解説」では、晩年の詩人と澤氏との間に交わされた印象的な会話として「柿本人麻呂、松尾芭蕉、西脇順三郎といわれるようになればいいのですが」（西脇）という言葉が引かれていた。「超自然詩の傾向は近世の詩の発達であるといふことを注意したい」（『超現実主義詩論』、本書第二巻一四三頁）というように、西脇自身が、西洋と東洋、古代と近代の連続と断絶の中で、融通無碍に詩を考えていた。そして澤氏も、古典から現代に至る日本詩歌史での位置と、西洋史受容も視野に収めた比較的な方法とを強く意識しながら、西脇順三郎を把捉しようとしている。近代の抒情と対決し、現代詩を改革した西脇の詩の営みの究明は豊饒な地平を有しており、今後の研究史に、本書が資すること大である。本書の出版を契機に、西脇順三郎研究の道が新たに拓けることを期待する。

（二〇一一年一一月刊、クロスカルチャー出版、B5判、総約一九〇〇頁、八、八〇〇円＋税）

（たかはし・ゆき　本学教員・近代文学）